

(1) 2022年9月2日(金)1面 掲載

◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<179>

散りやすき花 片岡 直樹 教授

産大レクチャー ア・ラ・カルト <179>

先日、博物館学芸員課程の学生および一般の受講者とともにオンライン上で被災した博物館や文化遺産の保全・復旧のための寄付をしたばかりです。

戦争は人の命だけでなくその土地の文化財をも「意図的に破壊します。支配しようとする側が支配される側の歴史を抹殺すること、その民族や共同体自体を存在しなからせていく。じつに

先曰、博物館学芸員課程の学生および一般の受講者とともにオンライン上で被災した博物館や文化遺産の保全・復旧のための寄付をしたばかりです。

おそろしいことです。近現代に限ってもナチスのホロコースト、中国の少数民族弾圧、イスラーム過激勢力によるパルミヤン石窟の破壊等々があり、今またその悪行が繰り返されている。

人の命は何ものにも代え難く、尊いものですが、過去の人々がつくり、守り続けてきた文化財にもそれと同様の意味がある。文化財は過去に生き残った人々たちが過去の

散りやすき花

ものとなる私たちが生き残った証であり、人の命そのものといつてよいから

文化財の破壊は、たんに「もの」が失われることではないのです。

利用していることです。18年の施政方針演説で安倍首相は当時、全国各地の文化財(国公立園などの文化的景観を含む)の活用を促進し、民間投資を呼び込んで親

さて、日本での話です。2019年4月に施行されたいわゆる改正文化財保護法と来年4月に施行される改正博物館法。この二つの法律に盛り込まれているのは「文化財の

光資源とすると述べており、これらの法の改正はその考えに基づくものです。

この首相に任命された当時の地方創生大臣が講演で「地方創生とは稼ぐこと」と述べているように

片岡 直樹

に、要は文化財を使って金を稼げというわけでは

たしかに「利活用」によって文化財が私たちが外国人にとって親しみやすいものになり、経済効果

声が全国の現場から寄せられているわけです。

前出の大臣など国宝建築のなかで外国人向けにお茶会(火と水を使う)をやることを提案し、これに反対した学芸員たちを「がた」と呼び「掃すべき」と発言して物議をかもしました。

劣悪な政治家は劣悪な国民が生み出す。言い古された言葉ですが、この国の国民ははたしてどうなのでしょいか？

會津八の弟子・小杉一雄は文化財についてこのように述べていま

す。

「そのかわくもろもろきこと、美しく散りやすき花のごとくでもあり、また風にもたえぬ佳人にも似ている。そして、その運命をすべて人間にゆだね、自分を守るべき何の力もないのである」

傷つき失われた文化財は二度と元に戻ることはない。皆さんのお一人お一人がそうしたいを強く持たれることを、私は心から願うばかりです。

(教授)

|| 毎月1回掲載 ||

(2) 2022年9月21日(水)2面 掲載

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

地域の交流拠点を訪ねる「小さな観光」事例調査 経済学部講師 春日 俊雄

「新めなす」 地域に学ぶ

地域をおこす

ー実践活動レポートー

地域の交流 拠点を訪ねる

「小さな観光」
事例調査

事例調査

観光ビジネス分野の春日ゼミナール(4年生)では、地域の維持・持続につながる「小さな観光」について市内の約20事業者をピックアップしてそれぞれを担当を決め、事例調査を行っている。そして、秋学期にはゼミ生が分担して執筆し、1冊の卒業レポートをまとめることとなっている。

研究テーマの小さな観光とは、地域の中で、事業者が暮らしをベースに家業や新たな生業を通じて地域を外に開き、市民だけでなく県内外から来訪者を迎える規模の小さな観光・交流を言う。

事例調査の事業者は定住人口が年々減少する地域にあつて、「人と人」「人と自然」「人と文化」「人と歴史」「人とものづくり」などの豊かな関係性を観光の新たな価値と捉えて交流を生み出し、まさに地域における「内外の交流拠点」となっている。

事例調査の方法は、各事業者のキーパーソンに直接取材をする方法で行われ、話を聞くゼミ生

業者が暮らしをベースに家業や新たな生業を通じて地域を外に開き、市民だけでなく県内外から来訪者を迎える規模の小さな観光・交流を言う。

事例調査の事業者は定住人口が年々減少する地域にあつて、「人と人」「人と自然」「人と文化」「人と歴史」「人とものづくり」などの豊かな関係性を観光の新たな価値と捉えて交流を生み出し、まさに地域における「内外の交流拠点」となっている。

事例調査の方法は、各事業者のキーパーソンに直接取材をする方法で行われ、話を聞くゼミ生

つた。留学生で秋学期卒業のタワーツェレン・エインフォルロンさんとフヤンデルゲル・アマカランさんは、ギャラリータネ「アイリーカフェ」を担当。ギャラリータネでは、オーナーの荒木文子さんから趣味の器をギャラリーとして具現化し、谷根地区に「新たな人の流れ」を作った考え方を教えてもらったこと。

アイリーカフェでは、矢島衛・慶子夫妻から「日常の村の風景」に価値を見だし、集落で生き生きと働く生き方に魅せられたこと。広田鉱泉湯元館では、長い時間をかけて「コソツ」の魅力を高め、県外客の絶えない温泉宿に創り変えた志

に宿としての哲学にふれることができた。2人には小さな観光を肌で学ぶと共にキーパーソンの先進的な考え方や人としての魅力にふれる貴重な体験になったようだ。経済学部講師・春日俊雄(同大学地域連携センター)



(3) 2022年9月27日(火) 2面 掲載

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

弥彦小学校国際セミナー ～留学生の活動～

「新潟大学」 地域に学ぶ 地域をおこす

ー実践活動レポートー

弥彦小学校 国際セミナー ～留学生の活動～

新潟産業大学国際センターはさまざまな機関と連携をし、地域の国際理解に努めている。先日、弥彦村立弥彦小学校で開かれたモンゴル国際セミナーに本学の留学生ダワツェレンエフ、オルチロンさん(4年、モンゴル)が初めて参加した。

モンゴルのエルデ村と国際交流を行っている。今回のセミナーは児童が留学生と交流することで、よりモンゴルへの理解を深めるとともに、国際感覚やコミュニケーション能力を高めることを目的としている。

児童はオルチロンさんが話すリアルなモンゴルの生活に興味津々で、気になることを積極的に質問していた。セミナーの中では児童から留学や太鼓など日本の文化を学ぶ機会もあり、オルチロン

さんは「この日のために準備してくれていたことがとてもうれしかった。貴重な経験ができました」と充実した表情で話してくれた。

本学の助教授・蒼原鳥瑠吉(モンゴル)は今回のセミナーについて「弥彦小学校に赴き、小学校の授業、給食、課外活動を体験した。子供たちの発表はとても素晴らしいと思った。留学生はモンゴルのことを話し、さらに交流が深まったと感じている。弥彦村はモンゴル国の学校と毎年交流をしていて、強い絆を感じた」と振り返っていた。

喜んできて良かったです。これからも交流を続けていければ」と来年度以降の開催も視野に入れている。

異文化を学び合う機会を通して相互理解を深め、価値観の多様性を学ぶ大切な時間になっている。

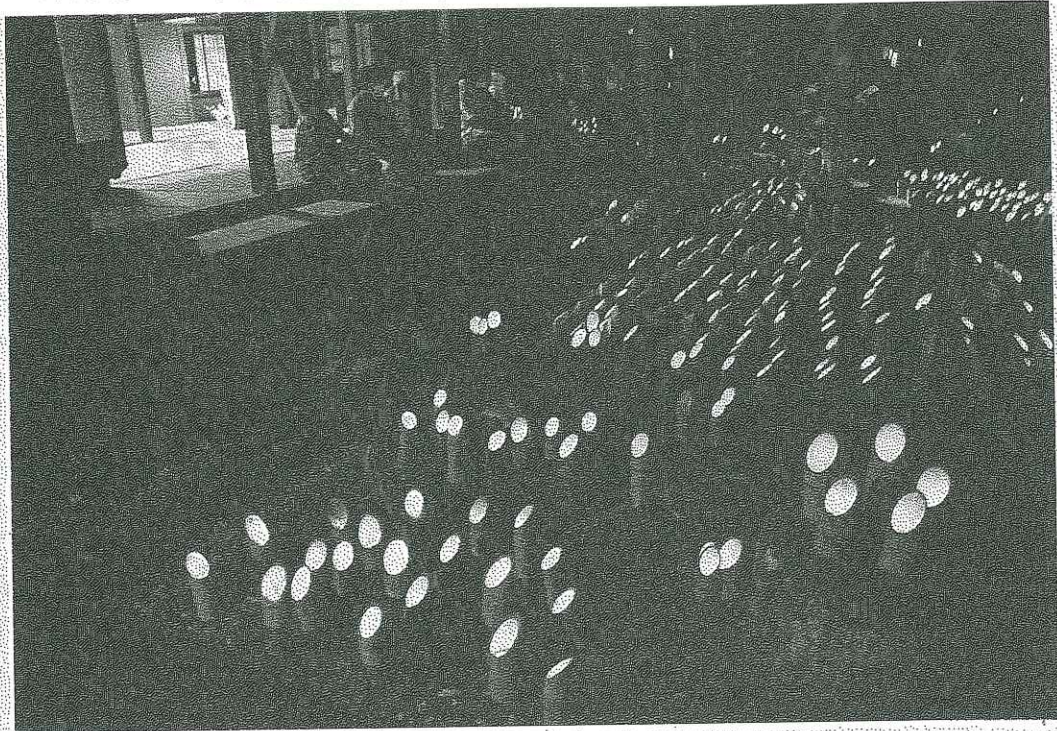
(同大学地域連携センター)



(4) 2022年9月28日(水) 2面 掲載

◆竹灯籠の明かり心和ませ

飯塚邸で3年ぶりにイベント



竹灯籠の明かり心和ませ 飯塚邸で3年ぶりにイベント

れた。庭園・秋幸苑などが竹灯籠のやわらかい明かりに包まれ、訪れた人たちを和ませた。

同地区では3年ぶりのイベント。地域の親睦を図るとともに、ひとときでもホッとしてもらえる空間をつくり、今後の活動の糧にしてもらおうと取り組んだ。スタッフは新潟屋大の学生を含め約60人。約15メートルの高さの竹を約4千本使った。

正面入り口から、竹灯籠で彩り、イルミネーションも設置した。秋幸苑を眺め、産天時代にボランティアで手伝った山本の神田夏海さん(27)は、3年ぶりに見て、素晴らしいと思った。改めて地域の方を感じる。ボランティアをしていた頃を思い出して懐かしかった。

この日午後から竹を配置したり、点火を手伝ったりした同大権田ゼミの4年生

らうそくの明かりがともされた竹灯籠によるイベント「竹あかり」は25日夜、飯塚邸

・本間隆斗さんは「1年生の頃に手伝って以来、作業は大勢の人数がいたので助かった。最終半年に地域のにぎわいに貢献できて良かった」と満足。

ボランティア フェスタ交流

ボランティア連絡協議会(松田幸男会長)主催のボランティアフェスタが市総合福祉センターで開かれ、参加者が交流を深めた。

フェスタは、ボランティア団体の横のつながりを広げ、情報交換、協力・連携関係の構築などで、それぞれの今後の活動向上に役立てることが狙い。また広く市民の参加を求め、ボランティアへの関心を高めてもらうことなどを目指し、先月開かれた。

交流ゲームやクイズ、ウクレレ演奏、合唱、手話劇などを繰り広げた。製作品の展示販売などもあった。

感染症禍に考慮し、PRはあまりせず、来場者は地域内を中心に約200人。大島会長(75)は「皆さんが楽しみ、「良かった」と言ってもらえたことで、スタッフはやりがいを感じ、力をもらった。いろいろな立ち場で連携することが本来の地域コミュニティのあり方かなと感じている」と話した。